

Hekikai Report

Hekishin Business Report quarterly Summer 2020

vol.
47
夏号

企業訪問 地域の躍動企業

ナゼロ株式会社 代表取締役 近藤 一幸氏

へきしんディスクロージャー

2020年度第1四半期

SDGsレポート vol.2

(2020年4月～2020年6月)

地域の景気動向 2020年6月調査

ビジネスリポート

上司と部下のギャップを探れ! 33

ネガティブ部下を、ポジティブ部下にするには?

碧海信用金庫

企業訪問
地域の躍動企業

知立支店お取引先

ナゼロ株式会社

代表取締役

近藤 一幸 氏



「健康デザイン」をテーマに、機能的で安全で、そして美しい家具の製作を手がけるナゼロ株式会社。専門メーカーとしての長い歴史、確かな技術とノウハウをベースに、医療・福祉関連施設用家具の製造で業界を力強く牽引しています。ビジネスに対する熱い思いと行動力で運をも引き寄せてきた近藤社長は、こうと思ったら貫き通す「信念の人」。社会に奉仕できる企業でありつづけたいと願う近藤社長にお話を伺いました。

左から知立支店細井係長、近藤社長、知立支店田口支店長

時代に合わせた柔軟な展開で業務用椅子の専門メーカーへ

農機具からスチール製パイプ椅子へ
技術開発を重ね、時代の変化に即応

明治38年、私の祖父が農機具を製造する「近藤農産具製作所」を興したのが、ナゼロの始まりです。父親が入社した昭和初期頃から少しずつ変化が起こってきたようで、昭和16年には有松絞りの技法のひとつであるクモ絞りの機械を開発。これは父が有松絞りの名店・竹田嘉兵衛商店の七代目と同級生だったことから、その影響を受けての開発だったと思います。それ以後は農機具と絞り機械の製造をしていましたが、太平洋戦争中の昭和18年頃には戦時体制のため工場は、豊川海軍工廠や中島飛行機の下請として航空機の部品を製造。終戦後に許可が下りるとまた絞り機械を造り、絞りの加工を広く商っていたことは、私も記憶に残っています。

昭和25、26年頃には、スチールパイプ曲げ加工の新しい工法を開発します。それまでのスチールパイプは、パイプの中に砂を詰めて熱して曲げていましたが、父は型を作って曲げる新しい方法を開発。当時、愛知県や浜松市あたりで盛んに自動二輪車が造られており、弊社でもハンドルやエキゾーストパイプなどを製造してホンダ、ヤマハ、メグロといったメーカーに納めていました。そして昭和27年頃には、二輪車で使用していたスチールパイプを使い、日本で生産され始めていたスチール製のパイプ椅子の製造も始めることになりました。これは終戦後の日本のライフスタイルの変化に合わせた業務展開で、畳の生活から椅子への欧米式のスタイルがブームになり、新素材によるスチール椅子が注目され、価格も手頃で爆発的に売れるようになりました。また東京と大阪の間にあるこのエリアでは、国道1号線を利用した物流も盛んでしたから、物流を担う

ドライバーが立ち寄るドライブインもたくさん造られ、スチールパイプ椅子の需要がどんどん増えていきました。父親が教育を受けた名古屋中学校は宣教師が創立した学校で、キリスト教をはじめとする外国文化の影響も大いに受けていましたので、そうした背景もあって新たな業務展開につながったのだと思います。

木工家具でもヒットを生みだし
家具の専門メーカーに

それから昭和40年代中頃までは、スチールパイプ椅子の製造を行っていました。私が入社した昭和48年頃にはパチンコ用の椅子がヒットして全国に広がり、社を挙げて製造していました。私は大阪営業所で営業をやることになったのですが、それまでアルバイトもしたことがなく、アメリカ帰りでうぬぼれていたこともあって(笑)、今後のパチンコ椅子の製造について父に意見をしたんですね。すると父は、それなら自分で考えて商売しなさいと、弊社の主力であり生産の80%を占めていたパチンコ椅子の製造をぱったりやめてしまったのです。私は困ってしまって(笑)別注家具などさまざまなことに挑戦しました。大阪に大弥商店という家具屋がありますが、当時竹中工務



▲昭和28～30年のパイプイス

▲パチンコイス

▲ナラ材で製作した木製の業務用イス



▲昭和50年、日本で初めて作られた業務用イスカタログ

まだ世にないけれど、役立つものを。「スリーパーシリーズ」誕生

大切なのはストレスなく過ごすこと
病院のための家具開発に着手

祖父も父もそうだったようですが、私は自分で何かを考え、まだ世にないものを作りたいと思っています。ところが、デザイン・素材・コストと一生懸命考え製造したものが、世に出てヒットするとすぐに真似をされてしまいます。いかに安く造るかだけに注力しているように思われるものも往々にしてあります。商売に対する考え方はそれぞれですので仕方ないことですが、私は人の真似をしたり、

すでにあるものを作ることをあまり好ましく思いませんでした。業務用椅子の専門メーカーとして製造を続けながら、辟易としていた時期がありました。そんなときに、病院建築界で非常に著名な、名古屋大学の柳澤教授と出会いました。また、ある病院の先生からも家具開発・製造を頼まれたのですが、私は病院といえば、とても混雑している待合スペース、薬や消毒薬剤などの臭い、無機質で冷たい感じのするインテリア…居心地がいい場所というイメージはなく、業務展開にも乗り気ではありませんでした。しかし病院という世界について話をするうちに、柳澤教授は碧南市民病院や愛知県が

んセンターなど多くの病院建築に携わり、よりよい病院づくりのためにさまざまな試みをされている方だと知りました。さらに病院の先生方も病院の持つマイナスイメージを変えたいと思われていることがわかり、病院のための家具開発・製造に取り組むことにしたのです。

病院の椅子は、健康な人が使う椅子とは違い、体の弱い方や具合の悪い方が使います。素材や仕様などちょっとしたことが命に関わる可能性もあるため、強度だけでなく安全性がとても大切です。そしてもうひとつ大切なのが、ストレスの問題です。私は昭和45年にアメリカへ留学しましたが、当初は英語が話せず、友人や知り合いもあまりいない中、体調不良に悩まされ、病院にいても治らないということが3ヶ月ほど続きました。慣れない環境でストレスを抱えていたんですね。英語が話せ、人を知りようになると知らぬ間に体調不良も治ったのです。ストレスが健康に大きな影響を及ぼすことを身をもって体験したのです。日本でよくある多床室での入院は、患者も付き添う家族も同室の方への気遣いが絶えません。早期治癒にはストレスなく過ごせる環境が必要不可欠であり、また医師や看護師などそこで働く人々の環境に配慮することも、とても大切なことなのです。

柳澤教授にはその後もお世話になり、国際的な病院建築学会や病院視察にご一緒する機会を得ました。病院のための椅子の開発に取り組むのは私たちが初めてでしたが、病院に携わるプロの方々には教わり、ともに勉強しながら、病院とはこうあるべきだと学びました。そうした知識や情報を基に、本当に必要なものは何なのか、私たちの作る製品の在り方について考えながら、病院のための家具開発・製造に取り組んできました。

安全で、機能的で、美しく 技術と思いで開発した「スリーパーシリーズ」

そうして誕生したのが、「スリーパーシリーズ」です。平成21年に第一弾の「スリーパーチェア」を発表しました。座面を持ち上げてロックを解除すると座面が引き出せる仕組みで、コンパクトながら、椅子とベッドの高い機能性を両立させています。腰への負担を和らげる素材、キャスター付きで容易な移動など、妊産婦や子どもなど誰でも安心して使うことができるようこだわって開発しました。シリーズ展開として、座面を二段階に引き出せ、2人掛けから4人掛けにもベッドにもなる「スリーパーソファ」や、ロビーや待合室といったラウンジ用椅子で、非常時には2脚を組み合わせればベンチやベッドとして使用できる「スリーパーラウンジ」などがあります。せっかく便利で快適な家具でも、部屋の間取りや医療機器

の制約によって使えないのでは意味がありませんから、左右対称にしたり、背もたれや肘のありなしを吟味するなど機能性をさらに高めるだけでなく、デザインや張り材も検証と改良を重ね、必要な機能を損なわずに美しく心地よくデザインするかということに注力してきました。

近年では、多くの建築家や専門家の研究と努力によって、明るいロビー、豊かな色彩のインテリア、不安を感じさせず快適に過ごせる個室などが取り入れられるようになってきました。若い人、子ども、高齢者、健康な人ばかりでなくいろいろな人が集まって過ごす病院は、「誰にでも使える家具」を作るうえでひとつの指標となる場所だと思えます。病院建築の初期から関わらせていただくことで、安全で、機能的で、美しい家具を作るための多くの経験を積むことができました。

ベッドに可変する“スリーパーシリーズ”



▲簡単操作でイスからベッドへ早変わり、スリーパーチェア A
特許第4699549号、第4733781号



▲コンパクトなソファがベッドへ早変わり、スリーパーソファ C
特許第6684010号



▲災害時に役立つ、イス2脚がベッドに変身、スリーパーラウンジ

独自の付加価値で、社会に奉仕できる企業でありたい

社会の課題に対応可能な製品を より多彩な施設に提案していきたい

病院の椅子として開発されたスリーパーシリーズですが、今後はさまざまな空間・施設に提案していきたいと考えています。そのひとつが、災害時に避難所の運営にあたる自治体です。学校や公民館といった避難所では、限られた狭いスペースの中で直接床に座ったり寝起きをしたり、多くの人が気を遣い合いながら苦しい時間を過ごすというのが現状です。そんなときに、普段使いの椅子をベッドとして使うことができれば、多少なりとも心が安まり、ストレスの軽減に繋がると考えています。他には、実際に東京の地下鉄でも採用されていますが、駅舎に設置しておけば、乗降客が気分が悪くなったときや災害時に帰宅困難者となったときでも体を休めることができますし、国が進める「働き方改革」でも、一定条件の基では臥床できる休養室を設けることが義務づけられていますから、広く一般企業にもご提案できます。スリーパーラウンジは、6セット12脚の椅子を重ねると量1畳分のスペースで保管が可能。収納スペースが少なくても魅力のひとつです。そして今世界中で最も大きな問題である感染症ですが、私たちの製品はアルコールや次亜塩素酸ナトリウムにも対応した張り材を使用しています。除菌しても張り材が脱色したり亀裂が入ったりすることがなく、安心安全快適に使用していただくことができます。

今年、新しく制作した製品カタログでは、こうした製品を豊富に掲載しています。スリーパーシリーズのような機能製品にはQRコードを添付し、操作方法を動画で視聴できるようになっています。動画なら、言語が異なる国の人にもすぐに操作方法を理解していただくことができますからね。よい製品を、どのようにしてより多くの人々に知っていただくか。病院だけでなく、自治体、公共施設などにどのようにPRしていくかが、今後の課題だと考えています。

■企業プロフィール

会 社	名	ナゼロ株式会社
本 社	〒448-8540	愛知県刈谷市今川町花池53
T E L	0566-36-1321	
F A X	0566-36-1329	
設 立	昭和28年5月	
資 本 金	5,380万円	
主 業 務 内 容	パブリックスペースに対応した家具、災害時に役立つイス、病院や高齢者・福祉施設に向けた家具の製造販売	
ホ ー ム ペ ー ジ	http://www.nazero.co.jp	

■企業（グループ）沿革

明 治 3 8 年	愛知県刈谷市において農機具の生産を始め、近藤農産具製作所として発足
昭 和 1 6 年	有松絞りの一種、クモ絞り機械を製作し、絞りの生産を始める
昭 和 1 8 年	豊川海軍工廠、中島飛行機の協力工場として航空機の部品製造を行う
昭 和 2 6 年	スチールパイプの曲げ加工技術を開発し、オートバイのハンドル、エキゾーストパイプの製造を始める
昭 和 2 8 年	社名を「名古屋オート工業株式会社」とし、スチールパイプ椅子の製造を始める
昭 和 4 4 年	パチンコ椅子を考案、製造を始める
昭 和 4 7 年	社名を「名古屋椅子工業株式会社」と改める
昭 和 5 0 年	ホテルレストラン・喫茶店などで使われる業務用家具を開発し、業務用椅子の専門メーカーになる
平 成 5 年	創立40周年の記念事業として新社屋を建設、ブランド名を「オート」から「ナゼロ」と改める
平 成 8 年	名古屋大学の柳澤教授のもと、病院・高齢者のための家具開発を始める
平 成 1 6 年	創業100周年を記念して、社名を「ナゼロ株式会社」と改める
平 成 2 1 年	「スリーパーチェア」を開発、以後多くの病室で採用される
平 成 2 4 年	高齢者のための椅子「ホルドチェア」を開発



商売は、価値ある提案あってこそ 多様な人々の暮らす社会のために

私が商売を始めるときに納得できなかったのが、安易に儲けを得ようとする。人の真似をして、安く作ったものに、さらにいくらかの儲けをのせて売るということは、私には到底理解できないことでした。プロとしてこだわって作り、思いを込め、製品を手にする人にとって価値ある提案ができなければならない。付加価値があつて初めて、商売が成り立つと考えています。私は何か選択に迷うときには、いつも難しい方を選びます。人がやらないこと、やりたくないこと、困難な道を選ぶと、そこにはまだ誰もやったことのないもの・ことがあるんですね。それが付加価値につながるのだと思います。

弊社には社訓はありませんが、「社会に奉仕できる企業」でありたいといつも考えています。健康な人、体の弱い人、若い人、高齢者…いろいろな人たちが共存できる、そういう社会であってほしい。若い人だけ、高齢者だけ、それではおもしろくないでしょう（笑）。安全性、機能的、そしてデザイン性…本当に大切なことは何かを考えながら、多様な人々が健やかに暮らすために必要なものを生みだしていきたい。ナゼロの家具が、喜びと豊かさをもたらすものでありたいと思っています。